

神津邦太郎 宛 明治二十八年【一八九五年】十二月十五日

寒氣彌増候處皆々様御捕益御清安奉拜賀。随て老生幸に無異乍憚御放念可被下候。御手製のバタ毎々御送致被下誠に難有、内外唯一品、その右に出るものなし。既に一週日前兼て大事に致し居り候品なくなり、左りとは當惑と存じ、東京にて龜屋、精養軒等へ人を遣し、神津バタはなきやと頻りに詮索致し候得共、有るものを無しと云ふか、真贋品切れか、兎に角に賣物なしとはねつけられ、何とも致方無之、特に一書を認めて御無心申上げんと存居候處へ、偶然にも二罐御達し被下、恰も天與の賜、早速いたゞき申候。過般も申上候通り老生儀如何なる譯にやバタを賞る習慣を成して、之を用ひざれば腹合不宜、然るに他の品は一切口腹に適はず、唯信州の神津バタあるのみ。故に私宅に西洋料理を命じて、バタだけは料理屋の品を謝絶致し候仕合、今後も此品あれば可なり、無ければ則全く廢するの外無之候。右の次第、御世辭でも何ても無御座、御禮は筆に盡し難く候。

過日老生が還暦の時には態々電報、遠路の處御心頭に被掛芳情不知所謝御禮申上候。  
右は重ね々々の御禮送申上度勿々如此御座候。頓首。

二十八年十二月十五日

諭吉

神津邦太郎様 格下

尚以草嚴始國助君其外様へ宜敷御傳聲奉願候。本年も餘日無之、來陽にも相成候はゞ御出京奉待候。  
今日の信州は昔年の山國にあらず。魚類も定めて御自由なると存候得共、何か塩蔵の海魚進呈致候やう申付置候。着の上、廚下の御用にも相成候はゞ本懐の至、國助君へも宜敷御配分奉願候。以上。

〔注 封筒表「信州北佐久郡志賀村 神津邦太郎様行 親展平安」同裏「封 東京芝區三田武丁目 福澤諭吉」スタンプ「武蔵東京三田・廿八年十二月十六日 八便」「信濃岩村田・廿八年十二月十七日 口便」。「尊嚴」とは神津吉助。「國助君」は邦太郎の叔父。〕

【意訳】 寒さが厳しくなつて参りましたが、皆様はお元氣のことと存じます。私も無事でおりますからご心配なさぬようお願いします。お手製のバタをいつもお送り頂いて本当にありがたく、國産輸入のいろいろな品物のうち、これ以上のものはありません。一週間前、大事にしていた（神津バタが）無くなって困つてしまい、東京で龜屋、精養軒などへ使いの者をやつて神津バタはないかと探しましたが（店では）あるのにな、と言つのか本当に品切れなのか、とにかく神津バタはないと断られ、どうにもしようがありませんので、お手紙を書いて（神津バタを送つてくださるよう）お願い申し上げようと思つておりましたら、偶然に二缶お送りいただき、天からの授かりもののような氣がして、早速頂きました。先日もし上げたように、私はどういうわけかバタが好きになつて、これを食べなければ腹具合が悪くなりますが、他のバタは一切口に合はず（口に合うのは）信州の神津バタだけです。ですから自宅で食事会をするときもバタだけは料理店のものを断つています。これからも神津バタだけあれば結構です。なければ全く（バタを食べるのを）やめるしかありません。以上のことはお世辭でも何でもありません。お礼を申し上げようもありません。

先日私が還暦のときにはわざわざお祝いの電報をいただき、遠くからお心に掛けていただいたご好意にお礼を申し上げます。  
以上、重ね重ねのお礼を申し上げます。

二十八年十二月十五日

諭吉

神津邦太郎様

なお、吉助さんはじめ國助君など他の方々へよろしくお伝えください。今年も残すところ幾日もありませんが、年が明けたらご上京をお待ちしております。現在の信州は昔の山國とは違い、魚なども自由に手に入ることと思いますが、塩漬の魚などを差し上げるように（家の者に？）言っておきました。善きましたら召し上がっていただければ幸いです。國助君へもお分けくださるようお願いいたします。

神津邦太郎 宛 明治二十九年【一八九六年】三月十日

餘寒漸く去る。好き時節に相成候。御全家皆々様益御清通奉拜賀。毎々御心頭に掛けられ御手製のバタ誠に難有奉存候。毎朝いたゞき御陰を以て老骨を潤し候。

此程朝鮮の知人より鵲の鹽ものを贈り來候。固より口に適すべきにあらず候得共、汽車便に差出候。御笑留被下候はゞ幸甚に御座候。別に北海道の品二樽、是も到來に任せ試に拝呈仕候。召上りも被成間敷候得共御覽可被下候。右御禮旁申上度、乍末筆尊嚴始め國助君へ宜敷御致意奉願候。勿々頓首。

二十九年三月十日

諭吉

神津邦太郎様

尚東京の春色亦可なり。其中御來遊奉待候。家人共よりも宜敷申上候よう申聞候。以上。

〔注 封筒表「信州北佐久郡志賀村 神津邦太郎様 平安」同裏「封 東京芝區三田 福澤諭吉」スタンプ「武蔵東京三田・廿九年三月十日・ル便」「信濃岩村田 廿九年三月十一日・八便」。〕

【意訳】 寒さもようやく去り、よい季節になりました。皆様お元気のことと拝察します。いつもお心に掛けられてお手製の（神津）バターをありがとございます。毎朝頂戴して、おかげさまで元気にやっております。

このほど朝鮮の知人から鶴の塩ものを送って参りました。お口に合わないとは思いますが汽車便で発送しました。お受け取り下されば幸いです。別に北海道の品一樽もいただきましたのでお贈りいたします。お召し上がりになるかどうか分かりませんがご覧ください。お礼かたがた申し上げます。手紙の終わりの方で申し訳ありませんが吉助さん始め國助君へよろしくお伝えください。

二十九年三月十日

論 吉

神津邦太郎 様

なお、東京の春もなかなか結構です。そのうちお遊びにいらっしゃるのをお待ちしております。家の者もよろしくと申しております。

### 神津邦太郎 宛 明治二十九年【一八九六年】九月？八日

漸々秋冷を催し候處益御清安奉拜賀候。随て老生事も幸に無異消光、乍憚御放念可被下候。今回も精品二到來、今早野外散歩、唯今歸宅、焼パンに附けていたゞき候處に御座候。

好き時節に相成、折々御出京可相成、何卒御立寄奉待候。

尊嚴竝に國助君も御變りなき事と存候。過日拙宅にて社友の茶話會を催し候處來客随分多く、近傍ならば御案内も可致事と存じ、難堪思ひ候。其節戯に、

三田 社友温平生 茶話乗閑來往輕

逆莫帝京座萬丈 一堂談笑與秋清

御一笑可被下候。

右御禮まで申上度勿々如此御座候。頓首。

二十九年九月八日

神津邦太郎様 几下

論 吉

尚以國助君は年尚若し、折々御出京、舊友に逢ふて論談可然存候。何卒御致意可被下候。

曾て朝鮮の金玉均に貫ひ候義和宮の書あり、老生は既に見終わりたるゆる轉贈致し度、御笑留可被下候。品物は小包便に差出候様申付置候。

【注】 「過日拙宅にて社友の茶話會を催し」云々の記事は前掲の案内状に見られる九月十三日の会合のことかと思われる。従つてこの書翰の日付「九月八日」は「十月八日」の誤記かと思われるが、疑を存しておく。

【意訳】 涼しくなつて参りましたがお元氣のことと存じます。私も幸い無事でおりますので、ご心配なさらないでください。今回も（神津バター）二（缶）が着き、今朝早くから散歩に出てただ今帰宅したばかりですが、早速トーストにつけていただいたところ。いい時期になりましたので時々はご上京していただき、（私の家へも）お立ち寄りくださるようお待ち申し上げます。

貴方様始め國助君もお変わりないことと思います。先日私の家で慶應の人達のパーティを行いました参加者も随分多く、（あなたのお宅が）近くなればご案内を差し上げることができたのにと、残念に思っております。そのときちよつといたずらをして、（次のような漢詩をつくりました）

三田 社友温平生

茶話乗閑來往輕

逆莫帝京座萬丈

一堂談笑與秋清

慶應義塾の友人たちは、日頃から仲がよい。

茶飲み話は暇があればいつでもだし、気軽に行き来している。

ともあれ、東京には雅用俗塵ばかり。

どうですか、一緒に談笑して、秋晴れを楽しみませんか。

（下手だと）お笑ください。

取り敢えずお礼申し上げます。

二十九年九月八日

神津邦太郎 様

論 吉

なお、國助君はまだ年も若いので時々は上京し、昔の友人に会っている話もされることも良いと思いますので、どうぞお心に留めておいてください。以前、朝鮮の金玉均から貰った和宮が書いた書面があります。私はもう見てしまったので（そちらに）差し上げます。お受け取りください。品物は小包で発送するように言っておきました。

【編者註】①「金玉均」……一八五一年～一八九四年（嘉永4～明治27）。李氏朝鮮末期の独立党の指導者で慶尚北道安東生まれ。一八八一年（明治14）

と一八八二年（明治15）に來日、福澤諭吉などと交わり、日本の近代化方式に傾倒、朝鮮の革新を計画したが成就せず、一八八四年（明治17）日本に亡命、一八九四年（明治27）上海で暗殺された。（ピクトリア現代新百科より）

②「和宮（かすのみや）」……一八四六年～一八七七年（弘化3～明治10）。第一二〇代仁孝天皇の第八皇女。一八六一年（文久元）京都から江戸に下向、翌年江戸幕府十四代将軍徳川家茂と結婚。下向するときには東海道を經由せず中山道を通り、佐久市岩村田付近も通行した。

その際、通行の前夜三日間、関係者以外は一切の通行が禁止され、住民も外出も禁じられたという。

（ピクトリア現代新百科および東村誌より）